

岡崎陽一著

人口統計学 増補改訂版

古今書院 1999年 248p.

「私は人口について研究しています」と言ったとき、それを聞いた人の反応は様々であるが、「いったいどんなことを研究しているのですか」と聞き返されることが多いように思える。以前なら人口爆発についての研究、そして最近では少子高齢化についての研究とのイメージを思い浮かべる人もいるであろう。実際に人口学の研究領域は多岐にわたり、人口学の研究者のなかでも社会学や経済学など様々な学問分野により強いアイデンティティをもつ人が多いことも確かであろう。本書『人口統計学 増補改訂版』では初版同様に「人口学は人口を研究対象とする学問である」(p2)とした上で、人口学はいまだ人口の総合的研究として確立される段階まで発達しておらず、特定の限定された視点から個別専門的に研究している段階であると位置付けている。初版が出版されてから約20年経た現在でも人口学をめぐる状況はあまり変わっていない。このように細分化された研究になりがちな人口学の研究のなかでも、「不可欠の分析用具」である人口分析の中心的な課題について説明し、計算方法を日本の実際の人口統計を用いて解説することが本書の目的である。

増補改訂版にあたって、初版の構成を踏襲しつつ最新の人口統計を用い、また、最近の研究成果が付け加えられた。本書の章立ては、I.人口学と人口統計、II.人口構造、III.死亡、IV.生命表、V.出生、VI.人口増加、VII.人口モデルとその応用、VIII.全国人口の将来推計、そしてIX.特殊な人口の将来推計となっている。かつて教科書として使用し、内容を記憶した読者も多いであろう。だが、各章とも引用される数値や表の多くは新しくなり、同時代の本として新たに出版されたことを実感させる。さらに、「VIII.全国人口の将来推計」は大幅に加筆されている。ここでは初版にあった厚生省人口問題研究所の昭和51年11月将来推計に加え、同研究所の昭和56年11月推計および昭和61年12月推計と国立社会保障・人口問題研究所の平成9年1月推計の概説がなされている。それぞれの推計が実施された状況や推計上の仮定などとともに結果がコンパクトにまとめられているため、日本の人口推計の流れと変化を把握するためにたいへん都合がよい。こうした変更によって、本書は人口統計学の教科書としての価値を再び高めることに成功している。

一方、今回出版された増補改訂版では「付表：主要人口統計資料」および人名・事項索引が削除された。主要な人口統計については入手が比較的容易なものも多く、また、インターネットで最新のデータが閲覧可能な統計も多いので、省略されてもとりたてて問題とはならないだろう。だが、書籍固有であり利用価値も高い索引が省かれたことは残念である。ただし、本書は初版と基本的に同じ構成であり、VIII.までは頁数もほぼ一致しているようなので、当面は初版の索引を複写して利用することも可能かもしれない。この点に関しては今後の改訂に期待したい。

初版はしがきにて著者は「人口統計学の日進月歩の発展の中で本書の内容は月日の流れと共に次第に陳腐化するのをまぬかれることはできないであろう。本書が若き同学の土によっていつの日か書き改められることを、筆者はむしろ喜びとするものである。」と記している。「若き同学の土」が筆者自身であったということは読者にとっても喜びである。次の改訂は新たな「若き同学の土」によって20年もの歳月を待たずに行なわれるのかもしれないが、そのときまで今回の増補改訂版は十分に活用されることになるであろう。『人口統計学 増補改訂版』は多くの人々が人口統計学の教科書として慣れ親しんだ初版と同じ構成であるうえに、新しい統計を用いた解説によって陳腐化をまぬがれ、今後も人口統計学の教科書として利用していくのに大変使い勝手の良い一冊である。(小松隆一)